

はしがき

本書は、日本の大学における経営学修士（いわゆる国内MBA）のアウトラインを説明するものです。

国内MBAの受験を決めた方を対象として、受験のノウハウなどを説明する書籍はこれまでも何冊か出版されているし、筆者もこれまでに8冊ほど執筆をした経験があります。しかし、国内MBAに対する興味があり、これから色々と調べてみようと思っている方向けにその概要を伝える書籍は、筆者の知る限り、出版されていません。

そこで、国内MBAで学ぶ内容、修了するまでに必要な時間や費用といった基本的なことから、入試問題の概要や取得後のメリットなど、やや踏み込んだ内容に至るまでを説明し一冊にまとめました。それが本書です。

筆者は、2003年に現在の早稲田大学大学院経営管理研究科（WBS）を修了し、同年から今に至るまで、国内MBAの受験指導をしています。在学中に得た知識やスキルはもちろん、そこで得た人脈は今でも自分を支えるかけがえのない財産ですし、数多くの教え子からも同様の声をたくさん聞きます。

筆者は、国内MBAは得難い知識と人脈を手にするができる場所だと思っています。

そのような国内MBAの魅力が、本書を手にとっていただいた方に伝わり、国内MBAを目指す方が出てくることを願い、執筆しました。

執筆に当たっては、筆者の多くの教え子の協力をいただきました。特に、以下の6名には本書の執筆に多大な貢献をしていただきました。青山学院大学大学院国際マネジメント研究科在学中の成璋さん、慶應義塾大学大学院経営管理研究科を修了した轟義昭さん、神戸大学大学院経営学研究科を修了した青木信生さん、東京都立大学大学院経営学研究科在学中の且隆志さん、一橋大学大学院経営管理研究科在学中の福壽太郎さん、早稲田大学大学院経営管理研究科を修了した中村宗樹さんです（2021年12月現在）。また、筆者が所属するアガルートアカデミーの方々には、企画から編集までお力をお借りしました。

皆さんのお力がなければ本書が世に出ることはありませんでした。改めて御礼を申し上げます。

本書の執筆をもって、筆者は次の挑戦に向かいます。筆者の終わりなき挑戦の旅はまだまだ続くのです。自然災害、コロナ禍、働き方改革、AI、IT化など先が見えない混沌とした時代の中で、創造的破壊を繰り返す旅人でありたいと思っています。

筆者の人生、これまですべて順調であったわけではありません。思い通りにならない時もありました。夢が実現せずに涙を流した時もありました。そんな時も、国内MBAでの苦勞した学びを思い出すことで、明日への不安が消えていきました。国内MBAでの学びは、心の中に存在する「希望の灯」です。

読者の皆さんも、国内MBAに進学すると、過酷な勉強の日々が続くと思いますが、「苦悩の海を泳ぎ抜けた先には、喜びに満ちた楽園がある」と信じて、一度しかない自分の人生をより劇的に、より感動的に、より献身的に生きていただきたいと思います。がんばってください!!!

2022年1月

アガルトアカデミー

国内MBA入試専任講師

飯野 一

目次

はしがき	i
CHAPTER.1 MBAとは？	
SECTION.1 MBAとは？	2
SECTION.2 MBAとMOTの違い	4
SECTION.3 MBAと中小企業診断士の違い	6
SECTION.4 MBAランキングと意義	9
SECTION.5 MBAの国際認証とは？	12
5-1. AACSB (The Association to Advance Collegiate Schools of Business)	14
5-2. AMBA (the Association of MBAs)	14
5-3. EFMD (European Foundation for Management Development)	15
CHAPTER.2 国内MBAの大学院紹介	
SECTION.1 エリア別国内MBA一覧	19
SECTION.2 国内MBAの種類	27
2-1. フルタイムMBAの特徴	28
2-2. パートタイムMBAの特徴	30
2-3. フルタイムMBAとパートタイムMBAの長所と短所	35
SECTION.3 国内MBA進学時の専門実践教育訓練給付金の利用	38
3-1. 専門実践教育訓練給付金の対象校一覧	39
SECTION.4 パートタイムの国内MBAを仕事と両立して修了するためのポイント	43
CHAPTER.3 国内MBAの志望校の選び方	
SECTION.1 ゼネラリスト型MBAとアカデミック型MBA	49
SECTION.2 ゼネラリスト型MBAでの学びの詳細・ケースメソッドとは	53

SECTION.3	アカデミック型MBAでの学びの詳細・修士論文とは	56
4-1.	国内MBAでは修士論文指導がおこなわれる	60
SECTION.4	国内MBAでアカデミックな修士論文が重視される理由	60
4-2.	日本企業の経営を正しく評価する方法	62
4-3.	修士論文を書くことで抽象的な論理モデル構築が身に付く	65
SECTION.5	国内MBAの難易度（受験倍率）	68
SECTION.6	実務経験がない大学生でも受験可能な国内MBA	75

CHAPTER.4 国内MBA入試の詳細と受験対策

SECTION.1	国内MBA入試の詳細	78
1-1.	国内MBA入試はいつおこなわれるのか	78
1-2.	国内MBAの入試科目は何か	79
1-3.	国内MBA入試の準備期間はどのくらい必要か	82
1-4.	国内MBA入試の勉強法（概要）	83
1-5.	国内MBA入試に英語の試験がある場合は、 どのくらいの英語力で合格するのか	85
SECTION.2	科目別の入試対策法	87
2-1.	国内MBAの小論文対策法	87
2-2.	国内MBAの志望理由書の書き方	105
2-3.	国内MBAの研究計画書の書き方	112
2-4.	大学院別の出願書類のタイプ	118
2-5.	国内MBAの面接	120
SECTION.3	合格者の志望理由書、研究計画書の事例	124
3-1.	志望理由書重視型	125
3-2.	研究計画書重視型	135
3-3.	中間型	144
SECTION.4	合格者の面接再現	163
4-1.	合格者の面接再現	163
SECTION.5	国内MBA受験のお勧め書籍	182
5-1.	国内MBA受験のお勧め書籍	182
5-2.	国内MBA受験対策としての予備校	192

CHAPTER.5 国内MBA大学院別の特徴、入試内容と対策法

SECTION.1	青山学院大学大学院国際マネジメント研究科	197
1-1.	特徴と授業料	197
1-2.	入試内容と対策法	200
1-3.	その他	200
SECTION.2	関西学院大学大学院経営戦略研究科	201
2-1.	特徴と授業料	202
2-2.	入試内容と対策法	204
SECTION.3	九州大学大学院経済学府	206
3-1.	特徴と授業料	206
3-2.	入試内容と対策法	208
SECTION.4	京都大学経営管理大学院	212
4-1.	特徴と授業料	212
4-2.	入試内容と対策法	214
SECTION.5	慶應義塾大学大学院経営管理研究科	217
5-1.	特徴と授業料	217
5-2.	入試内容と対策法	219
SECTION.6	神戸大学大学院経営学研究科	221
6-1.	特徴と授業料	221
6-2.	入試内容と対策法	223
SECTION.7	中央大学大学院戦略経営研究科	225
7-1.	特徴と授業料	225
7-2.	入試内容と対策法	227
SECTION.8	筑波大学人文社会ビジネス科学学術院	229
8-1.	特徴と授業料	229
8-2.	入試内容と対策法	231
SECTION.9	東京工業大学環境・社会理工学院	233
9-1.	特徴と授業料	233
9-2.	入試内容と対策法	235
SECTION.10	東京都立大学大学院経営学研究科	238
10-1.	特徴と授業料	238
10-2.	入試内容と対策法	240
SECTION.11	同志社大学大学院ビジネス研究科	241
11-1.	特徴と授業料	241
11-2.	入試内容と対策法	243

SECTION.12	一橋大学大学院経営管理研究科	244
12-1.	特徴と授業料	245
12-2.	入試内容と対策法	246
13-1.	特徴と授業料	250
SECTION.13	兵庫県立大学大学院経営研究科	250
13-2.	入試内容と対策法	252
SECTION.14	法政大学大学院経営学研究科 経営大学院イノベーション・マネジメント研究科	253
14-1.	特徴と授業料	254
14-2.	入試内容と対策法	257
SECTION.15	明治大学専門職大学院グローバルビジネス研究科	259
15-1.	特徴と授業料	259
15-2.	入試内容と対策法	261
SECTION.16	横浜国立大学大学院国際社会科学府経営学専攻	263
16-1.	特徴と授業料	263
16-2.	入試内容と対策法	265
SECTION.17	立教大学大学院経営学研究科経営学専攻リーダーシップ開発コース	267
17-1.	特徴と授業料	267
17-2.	入試内容と対策法	270
SECTION.18	立教大学大学院ビジネスデザイン研究科	273
18-1.	特徴と授業料	273
18-2.	入試内容と対策法	276
SECTION.19	立命館大学大学院経営管理研究科	278
19-1.	特徴と授業料	278
19-2.	入試内容と対策法	280
SECTION.20	早稲田大学大学院経営管理研究科	282
20-1.	特徴と授業料	283
20-2.	入試内容と対策法	285

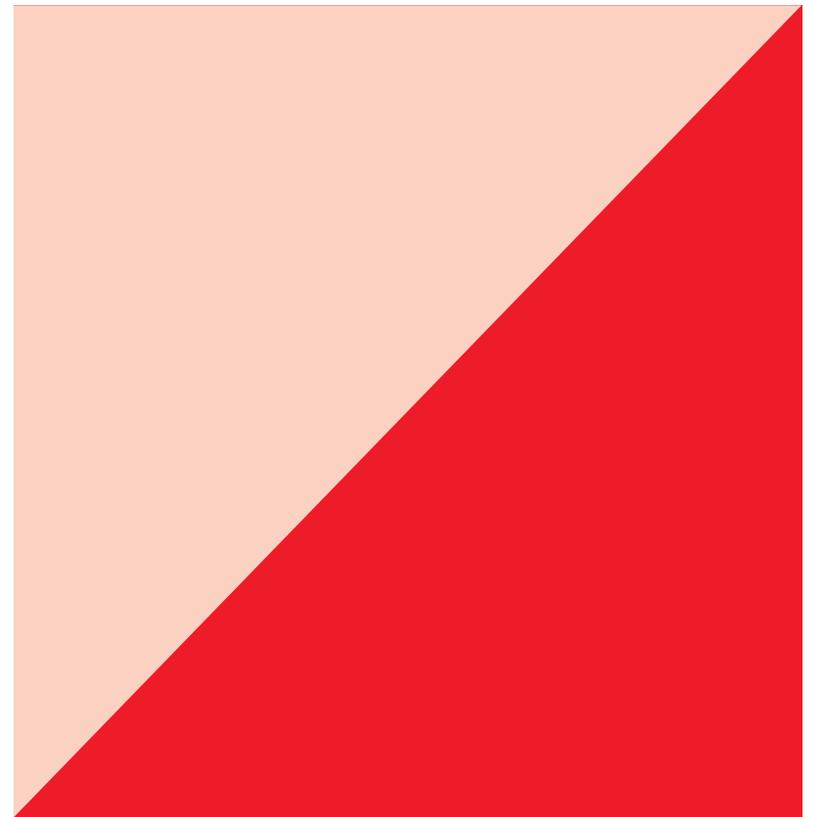
CHAPTER.6 国内MBAに入学する意義

SECTION.1	国内MBA取得のメリット	289
SECTION.2	国内MBAと転職	293
SECTION.3	国内MBAを生かした自分ブランドの構築法	295
3-1.	本を書く	296
3-2.	学術論文を書いて学会発表する	298
3-3.	マスコミに出る	300
3-4.	ジャンルの壁を壊す～奥深き芸術作品としての講義を目指す～	302

CHAPTER.7 国内MBAと幸福

SECTION.1	一人の人間に与えられた時間は有限である	307
SECTION.2	熱い魂を燃やせる仕事を探す	308
SECTION.3	幸福探しの旅、それが国内MBA	310
SECTION.4	幸福の中で成し遂げた仕事の成果は一生の財産	312
SECTION.5	新たな時代の扉を自らの手で開く	314

CHAPTER.1
MBAとは？



SECTION.1

MBAとは？

MBAとは、Master of Business Administrationの略で、日本語に直すと、経営学修士号もしくは、経営管理修士号と呼ばれる学位です。この学位は、経営学の大学院修士課程を修了すると授与されます。MBAでは、企業が利益（経済的価値）を出して、永続的に存在するための経営管理手法を学びます。学ぶ内容は、経営学に関する全般的な知識です。具体的には、経営戦略、マーケティング、組織論、組織行動学、アカウントティング、ファイナンス、オペレーションマネジメント、生産管理、情報マネジメント、経済学、統計学など、企業経営をしていく上で必要となるすべての知識を学びます。このように経営学全般に関することを学ぶため、修了後は経営者、起業家となる方や、コンサルティング・ファーム、ベンチャーキャピタル、投資銀行、事業会社の経営企画部門・マーケティング部門・財務部門などで実務に従事する方が多いです。

MBAの歴史をたどってみると、1881年にウォートン・スクールが最初のビジネススクールとして設立されました。そして、1920年代にはハーバード・ビジネス・スクールが状況分析と経営判断の能力を訓練するケースメソッドという教育アプローチを開発し、この方法は多くのビジネススクールに採用されるようになりました。

日本では、慶應義塾大学大学院経営管理研究科（KBS）が1962年に創立された、最も歴史のあるビジネススクールです。現在では、全国の大学院でMBAコースが開講されています。国公立大学では京都大学、神戸大学、大阪

大学、兵庫県立大学、筑波大学、東京都立大学、横浜国立大学、一橋大学、東京工業大学、北海道大学、小樽商科大学、九州大学などで開講されています。私立大学では先の慶應義塾大学以外では、青山学院大学、明治大学、立教大学、中央大学、早稲田大学、東洋大学、多摩大学、関西学院大学、同志社大学、立命館大学、名古屋商科大学、グロービス経営大学院など50以上の大学で開講されています。国内MBAの詳細は、第2章1項の「エリア別国内MBA一覧」をご覧ください。

詳細は第6章で説明しますが、本書を読み進める上での前提知識として、MBAで学ぶ意義を簡単に説明しておきます。MBAで学ぶ意義として最も大きな点は、企業経営に関するゼネラリストとしての知識が得られることによって、将来、経営のポジションに就くための準備ができることです。日本の場合は崩れてきたとはいえ、いまだに多くの企業が年功序列を採用しています。そのため、経営のポジションに就くのは比較的年齢が上がった時点になります。それまでは現場で一つの職能のプロとして仕事をしていきます。一つの職能というのは、営業なら営業だけをやる、製造なら製造だけをやる、ということです。一つの職能のプロとして経験を積んでいった先に経営者としてのポジションが待っているというのが日本企業のマネジメントの実態です。しかし、そこには大きな問題があります。それは経営者というのは、すべての職能（たとえば、営業、製造、研究開発、会計・経理、ファイナンス、マーケティング、全社戦略、事業戦略）を把握した上で意思決定をすることが仕事なのですが、一つの職能しか知らない人にはそれができないということです。

では、どのようにしてすべての職能に関する知識を得るのでしょうか？その実務で学ぶことができない職能に関して学ぶ機会がMBAであり、MBAでの学習によって将来経営のポジションに就いた時に全社的な視点で的確な意思決定ができるようになるのです。

以上のように、経営のゼネラリストとしての知識やスキルを得られるのがMBAなのです。そのため将来的に経営のポジションを担うビジネスマンに人気となっています。

SECTION.2

MBAとMOTの違い

ここではMBAとMOTの違いについて説明します。

まずは、取得できる学位や、学ぶ内容の違いについて説明します。

MBAとは、説明した通り、Master of Business Administrationの略で、日本語に直すと、経営学修士号もしくは、経営管理修士号と呼ばれる学位です。

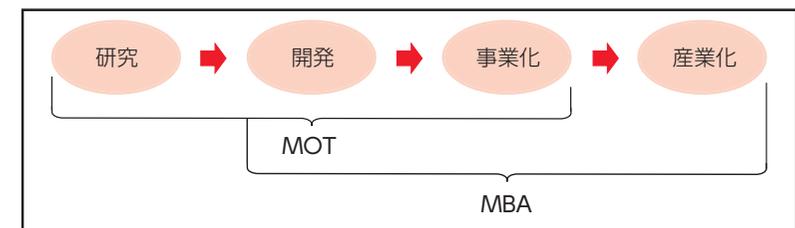
MOTとは、Management of Technologyの略で、日本語に直すと、技術経営修士号と呼ばれる学位です。MOTでは、製品開発における技術力をベースにし、研究開発の成果を商品・事業に結び付け、経済的価値を生み出すための経営管理手法を学びます。そして、技術をベースにした新たな価値創造ができる人材を育成することを目的としています。学ぶ内容は、MBAと重複する部分が多いのですが、技術と市場ニーズを結び付けるマーケティング手法・リスク管理手法、新たな技術を用いたビジネスモデル構築方法、創造力の育成法といった点がMBAよりも重視されています。修了後は、技術者を束ねる研究開発部門のリーダー（候補）、技術系のベンチャー企業の経営者、技術系ベンチャーの起業などの実務に従事する方が多いです。

次に、技術ベースの事業創出の4つのステージを用いて、MBAとMOTの違いをより根本的な点から説明します。

技術ベースの事業創出には4つのステージがあると言われています。4つのステージを時系列的に整理すると、「研究」→「開発」→「事業化」（商品化）→「産業化」となります。「研究」を進めて技術を市場ニーズに結び付け、具

体的な製品の構想（イメージ）ができなければ「開発」ステージに進めません。「開発」ステージに進んだものを製品として仕上げ、適切な経営資源を配分し、製造・販売して売上までつなげられなければ「事業化」（商品化）ステージには至りません。「事業化」（商品化）を成功させるためには、競争優位性を構築し、多くのライバル企業との生き残り競争に勝つ必要があります。これが実現できなければ「産業化」ステージには到達できません。新規事業創出の成功確率が低いといわれる理由は、このプロセスの困難さに示されていると思います。各ステージへの移行時の障壁を乗り越えていくという不確実なプロセスにおいて、いかに成功への確度を上げていくかが大切になります。MBAやMOTでは、その方法論を学ぶことは共通していますが、どのプロセスに力点を置くかが異なります。

具体的には、MBAでは上記ステージの中で、「開発」「事業化」「産業化」ステージでの経営管理手法を学ぶことが中心になります（ただ、「研究」「開発」ステージを学ばないということではありません）。MOTでは、「事業化」を意識しながら、「研究」「開発」ステージでの経営管理手法を学ぶことが中心になります（ただ、「産業化」ステージを学ばないということではありません）。



以上のように、事業創出プロセスにおいて、どのプロセスに力点を置いて経営学を学ぶか、という点がMBAとMOTの違いです。

SECTION.3

MBAと中小企業診断士の違い

ここでは、MBAと中小企業診断士の違いについて説明します。

MBAとは、説明した通り、Master of Business Administrationの略で、日本語に直すと、経営学修士号もしくは、経営管理修士号と呼ばれる学位です。

中小企業診断士は、経営コンサルタントとしては唯一の国家資格です。国家資格ですから、国家資格試験に合格することで取得できます。中小企業診断士試験に合格するために学ぶ内容は、MBAとほぼ同じですが、正式な試験科目名としては、「経済学・経済政策」「財務・会計」「企業経営理論」「運営管理（オペレーション・マネジメント）」「経営法務」「経営情報システム」「中小企業経営・中小企業政策」の7科目となっています。この中で、「中小企業経営・中小企業政策」は中小企業診断士に特有の科目です。中小企業診断士は、中小・零細企業向けのコンサルタントのため、「中小企業経営・中小企業政策」に関して深く学ぶ必要がある点は納得できると思います。資格取得後のキャリアですが、実際に中小企業向けのコンサルタントとして独立する方、今勤務している会社の現在の業務で、中小企業診断士で学んだ知識を生かす方、コンサルティング会社への転職といった形で資格を生かす方などさまざまです。

では、MBAと中小企業診断士の共通点と相違点について説明します。

共通点の1つ目は、経営学に関する全般的な知識を学ぶことができる点です。先に説明した通り経営のポジションに就くためには幅広い分野を学ぶ必

要がありますが、MBAも中小企業診断士も、どちらも経営学に関して全体的に学ぶことができます。

2つ目は、修了後（取得後）のキャリアにおいて、独立することが可能な点です。副業が解禁になり、終身雇用が崩壊しつつある日本において会社に依存した生き方はリスクが高いです。自分の専門性やスキルを持って、自立して生きる道を模索する必要が出てきています。その際に自身の専門性やスキルを高める手段として、MBAも中小企業診断士も非常に有効です。

次に相違点です。1つ目は、学位か国家資格かの違いです。この違いが大きく影響する例として、経営コンサルタントとして独立する場合があります。中小企業診断士は国家資格のため、国に認められたコンサルタントとして、顧客の信用を得やすく、顧客獲得がしやすいと思います。MBAは学位のため、コンサルタントとしての能力を認めるものではありません。そのためMBA修了後にコンサルタントとして独立した場合に、中小企業診断士と比較すると顧客からの信用度は低いと思われます。

2つ目は、学び方の違いです。中小企業診断士は資格試験のための勉強をするので、学び方は自分でテキストを暗記したり、過去問を解いたりすることが中心です。基本的に一人で勉強します。MBAはケース・スタディで学ぶ大学院が多いです。ケース・スタディとは、企業の事例（ケース）をもとに、個人分析→グループディスカッション→クラスディスカッションという流れで、ディスカッションを通して事例を学ぶ方法です。ケース分析の予習は一人でおこないますが、授業ではグループでディスカッションをしながら、同じクラスの生徒と一緒に学ぶことになります。クラスの生徒は日本人だけでなく海外からの留学生も多く存在するため、多様性の中でさまざまな意見触れられます。このようなグループでのディスカッションを通して、組織をまとめるリーダーとしての素養を実践形式で学ぶことができます。この点は中小企業診断士とは大きく異なっていると思います。

3つ目は、人脈形成のチャンスの有無です。MBAは2年制の大学院ですので、同学年の学生同士は密なつながりを持ちます。これは大学の同期などと同じです。大学時代の同期というのは一生の友人につながる関係だと思いま

す。この一生のつながりといえるビジネス上の仲間が、MBAの大学院生活の2年間で形成されます。この関係はMBAを修了した後も一生途絶えることのない貴重な人脈として大きな財産になります。例えば、起業する際に、同期の学生を誘って一緒に起業したり、大企業に勤務する友人が役員に昇進した際などは、同期が勤務する会社同士で業務提携をおこなったりすることがあります。中小企業診断士の場合は、国家資格であるため、MBAのような同期とのつながりはそれほどできません。この人脈形成のチャンスは、MBAと中小企業診断士との大きな違いだと思います。

これまで読まれた方には、MBAと中小企業診断士の両方に興味を持った方もいらっしゃると思います。双方を取得したいと考える方には、双方を効率的に取得する方法がありますので、最後に説明したいと思います。

中小企業診断士の1次試験に合格している方が、中小企業診断士養成課程を併設しているMBAに進学すれば、中小企業診断士の2次試験が免除になり、中小企業診断士の資格が得られます。中小企業診断士1次合格→MBA修了→双方を取得ということが可能になります。

この中小企業診断士養成課程を併設しているMBA大学院には、城西国際大学大学院ビジネスデザイン研究科、法政大学経営大学院イノベーションマネジメント研究科、東洋大学大学院経営学研究科、兵庫県立大学大学院経営研究科、日本工業大学大学院技術経営研究科、関西学院大学大学院経営戦略研究科（2022年から）、名古屋商科大学大学院などがあります。

MBAと中小企業診断士のダブル取得を目指す方は、まず中小企業診断士の1次試験のための勉強をします。1次試験7科目の合格が達成できたら、次はMBA受験の勉強をし、上記大学院のいずれかに入学します。そしてMBAを修了すれば、MBAと中小企業診断士のダブル取得が達成できるのです。ぜひ挑戦してみてください。

SECTION.4

MBAランキングと意義

まず、MBAランキングとは何かを説明します。欧米では、日本の大学の偏差値のような序列が、MBAにはあります。それがMBAランキングです。高いランキングのMBAを修了した方が、平均給与が高くなったり、MBA取得前後での給与上昇率も高くなったり、キャリアアップの可能性が高くなったりします。ランキングの決定基準は、「卒業後3年間の平均給料」「MBA取得前後での給与上昇率」「現在の給料に対する、MBA費用・期間に値する価値」「キャリアアップの程度」「目的の達成率」「学校のキャリアサービス」「研究でのランキング」「留学生の数」「女学生の数」などの評価項目を総合してスコアが付けられます。そのスコアの高い順に並べたのがMBAランキングです。

このMBAランキングが持つ意味は、欧米と日本では異なります。そこで、まずは欧米において、MBAランキングが持つ意味を説明します。欧米の企業は経営者が生え抜きではなく、外部からヘッドハンティングによって招かれる慣習が存在し、経営者という職業が成り立っています。そのために、経営者になってヘッドハンティングされることを望む場合は、MBAはその候補になるための条件として重要な要素となっています。欧米の企業の経営者の多くがMBAホルダーによって占められています。そして、その経営者候補となるためには、ランキングが上位のMBAを卒業した方が有利になりますので、MBAランキングは重要な意味を持ちます。

一方、日本ではどうなのかと言いますと、日本ではMBAのランキングはあまり意味を持ちません。どうしてそのように言い切れるのか、その理由を説

明していきます。

日本でMBAランキングが意味を持たない理由は、日本の大企業の経営者（取締役、執行役員を含む）は生え抜きの社員が多くを占めているからです。日本の雇用慣行として、終身雇用、年功序列があります。従業員は一生一つの会社に勤務するケースが現在でも多いです（ベンチャー企業等は除きます）。そのため、社員は社内の階層構造のステップを一つ一つ上がっていき、最終的なステップとして経営者になるケースが多いです。よって、日本で経営者になるためには、経営者としてのスキル以前に、社内政治に勝ち残ることが重要になります。MBAは、経営者としての知識やスキルを身に付ける場ですから、終身雇用を前提とした生え抜きの社員が自然に経営者に昇進する日本ではあまり意味を持ちません。そのために、ランキングなどはまったく関係ないのです。その証拠に、皆さんの会社の人事部の方に、「採用の際にMBAランキングを参考にしますか？」と質問してみてください。ほぼ100%の確率で「NO」という回答が返ってくると思います。

ただ、日本にいながらも、外資系企業でキャリアを築いていこうと考えている方、日本から出て行ってグローバルで活躍したい方は、MBAランキングを意識してもいいと思います。日本にいながら、日本の企業で働いていこうと考えている方には、これまで説明してきた通り、MBAランキングなどはまったく考慮する必要はないのです。

では、日本でMBAを取得する意味は何なのでしょう。この点に関して筆者の見解を述べたいと思います。それは、MBAという学位自体に意味を持つ欧米とは異なり、MBAで学んだ戦略構築スキルやマネジメントスキルを実務で発揮して既存組織のマネジメントスタイルの変革をすることです。これができるのはMBAを修了したMBAホルダーだと筆者は考えています。MBA取得によってすぐに昇進や給与が上がるといったことは、日本ではありませんが、MBAで学んだことを実務で生かすことで成果を出すことは可能です。この成果を出すことを積み上げていくと、将来的には経営者候補になる可能性は高まります。まさに実力でポジションをつかむのです。MBAを取得した人が、既存組織を変革して成果を出していくことは、日本の企業の成長性を高

めることにつながります。日本の企業は年功序列ですから、この成果がすぐに給与に結び付くことはありません。しかし、日本の終身雇用や年功序列は近い将来、維持できなくなると思います。日本企業も、年功序列による生活給型の人事制度から成果型の人事制度への移行期にあると思います。将来的には、MBAが評価される時は来ます。その時に備えて、今は実力と経験を積み上げていく時期なのです。このようなMBA人材が増えることが、低迷する日本の経済が回復するキッカケになるのです。

現時点では、日本企業で働いている限りは、MBA＝高い給与、高いポジションというわけにはいきませんが、それらを将来手にするためにも、今は仮に給与が低くてもめげることなく経験を積んで、成果を積み重ねていくようにしてください。近い将来は、日本でも欧米のように、MBA＝高い給与、高いポジションという時代が来ると筆者は考えています。

最後に、これから国内MBAを目指そうとお考えの方に、今やるべきことをお伝えしようと思います。今はランキングなどは気にせずに、自分がなぜMBAに進学しようとしているのか、という志望動機を考えてください。MBAというのは、経営学に関する全般的な知識を学ぶ場所です。具体的には、経営戦略、マーケティング、組織論、組織行動学、アカウンティング、ファイナンス、オペレーションマネジメント、生産管理、情報マネジメント、経済学、統計学など、企業経営をしていく上で必要となるすべての知識を学びます。では、皆さんは、なぜこのような経営学の全般的なことを学ぶ必要があるのですか。この点を考えてみてください。その際には、将来、自分がどうなりたいのか、というキャリアゴールを考えるといいと思います。将来のキャリアゴールから逆算して、どうして今、経営学を学ぶ必要があるのかを考えるのです。皆さんの夢の実現は、この一歩から始まります。皆さんが、日本の企業の変革をしていくような人材になることを祈っています。